

# ラグビーW杯2003

## その三 flair

現代はpowerの時代だといわれています。大きな体格、筋肉隆々とした肉体には、本当に力強さがみなぎっています。そんな中でさらにラグビーに求められているものは、自由奔放な楽しさと感動の源泉であるflairあふれるゲームが展開されることです。縦横と緩急の変化、力強さに加えてプレーの継続による攻防の意外性による興奮・感動は、言語に尽くせないものがあります。前回のW杯でのフランスの活躍は目覚ましいものがありました。走り回り伸び伸びとnatural instinctive即ち自由奔放、本能のままに戦ったと絶賛されました。闘争発想の駆使はflairのサンプルと言われました。

今回のW杯のGERALD DAVIESの評の題がIt's just not flairとあるのも興味深いです。そして、評のなかに、次のように述べているのも面白いです。

Teams need to play using plan with which they are comfortable.

日本がフランスに善戦したということに評判がたちました。しかし、冷静に見たら前回とメンバーが異なるとはいえ、フランスチームに今回は格別のもものがなく、ランキング5位の力で、格下の相手に適当に、次を見据えて相手をしていたというのが率直な感想ではないでしょうか。フランスのイングランド戦での戦いぶりは、雨中とはいえイングランドのペースにはまったというか、どちらが強いかというより、勝ち残りチームを決める戦いに終始したというべきでしょう。取り上げるべき大きな要素はありませんでした。

期待されたNZとオーストラリア戦は、開催国の負けられない意地が勝敗を分けたというべきで、どちらが強いという問題ではないでしょう。

優勝戦はイングランドの初Vへの執念がみられました。彼らは今回こそエリス杯を持ち隔らねばならなかったのです。ラグビーワールド誌のトップ評記事に、PAUL MORGAN氏が、

「England are rightful world champions」

と題しているのは非常に興味深いものがあります。

rightfulはlegitimately entitled to position 即ち地位に、合法に、正当に、資格・権利が与えられたという意味のなかに喜びと誇りが感じられます。

そしてゲームについては、I believe reflect the spirit of rugby we all loveと述べ、さらに、great victory, which gives a huge boost to whole of northern hemisphere rugbyと結んでいます。イングランドにエリス杯を持ち帰る優勝は、北半球ラグビーの後押しとなると同時に、イングランドの盟主としての自負と達成感を物語っています。

つまらない話としては、3位決定戦は面白くなかったことです。W杯は順位を決める大会ですから、競技全般の風習に従っているのですが、無理に決めなくてもよいでしょう。メンバーから言っても3位だから3番目に強いと断定できるような対戦ではなかったのは残念なことです。

日程的に問題が指摘されていました。powerはレベルアップしましたが、昨年来の前哨戦の戦い方をさらに手固いものにまとめ、順位を決める本番にそのまま持ち込まれたというだけのもので、flairという面での新しさや面白さは見られなかったのは残念なことですが、ある意味当然とも言えるべきことでしょう。

2004.01.11

西川 義行